

## デューイのコミュニケーション概念の明晰化

高橋 佳子

はじめに

ジョン・デューイ (John Dewey, 1859-1952) は彼の生涯を通して独自のコミュニケーション論を展開した。コミュニケーション論はデューイ哲学の根本原理となっており、デューイは彼の様々な著作において、コミュニケーションという概念を多様に使用している。

例えば、最近におけるラングズドルフとスミス (Lenore Langsdorf & Andrew R. Smith) らによるデューイを含めたプラグマティズムのコミュニケーション論の再評価の動向はデューイ哲学におけるコミュニケーション概念の重要さと、その現代における解釈可能性を表すものである。このようにして、デューイ哲学においてはコミュニケーション概念が重要な位置を占めているのであるが、この概念の把握にはある問題が常につきまとう。それは

デューイ哲学における問題の一つと深く関係している。それは、デューイによって主張される概念、すなわち、デューイが多用する「経験 (experience)」や「成長 (growth)」という概念によって意味されるものが曖昧であるため、その言葉の定義を明晰にしなければ、その内容は受け取る人々によって様々に解釈されてしまうという問題である。例えば、クレミン (Lawrence A. Cremin) は「二元論に対立する戦争において、デューイはしばしば『経験』や『成長』や『探求』や『興味』というような言葉を多義的に解釈したので、それらは他者によっていかなるものをも意味するように使用されるものであった。：：〈引用者・中略〉：その困難は彼を引用した人々の多くが、たとえ実際に彼を読んだとしても、彼の言っていることを読みとらなかつた(という)ことである」(Cremin, 1964, pp. 237-238) と述べている。そして、コミュニケーションという概念はそのようにして誤解されてしまう概念の

一つなのである。我々は、日常生活において多様な様式で繰り広げられる他者との関わりを持っており、その関わり状況を指し示すためにコミュニケーションという言葉を使用しているように思われる。しかしながら、実際にはクーン(Thomas S. Kuhn)がパラダイムが変われば、言葉によって意味されるものも変わると主張したように、ある言葉が意味するものはその言葉の定義づけをなす人間がどのようなパラダイムで事象を捉えているのかに規定されている。同様にして、デューイがコミュニケーションという言葉にどのような価値づけをなし、どのような文脈でそれを使用しているのかを理解しなければ、その概念は真に意味されるものから離れてしまうのである。そこで、本稿では、デューイによって主張されるコミュニケーション概念によって意味されるものを検討し、彼がコミュニケーションをどのように捉えているのかを明らかにする。それを明らかにしてこそ、他者が提示するコミュニケーションとは性質を異にするデューイのコミュニケーションの意義が示されるだろう。

## 一、共通理解と成長を促すコミュニケーション

デューイがコミュニケーションについて語る時、それはコミュニケーションを行えば、人間は互いに理解し合い、かつ、成長することができるという積極的な意味が含まれている。しかしながら、コミュニケーションを人間間の関わりと捉える時、果たして、すべてのコミュニケーションが人間間の共通理解を可能にし、また、すべてのコミュニケーションが人々の成長を促すと言えるのだろうかという問題が生ずる。これらはデューイのコミュニケーション概念把握につきまとう批判である。以下に、このような批判をふまえながら、デューイによって提示されるコミュニケーション概念に含まれる積極的特質について検討する。デューイは『民主主義と教育』(1916/1966)の中で次のように述べている。

コミュニケーションは人々が物事を共有するようになる方法である。…(引用者・中略)…共通理解への参加を保証するコミュニケーションは同類の情緒的かつ知的な性向―期待や要求への反応の仕方のようなもの

—を獲得するものである (Dewey, 1916/1966, p. 4)。

以上の引用文から導き出されるように、デューイが論ずるコミュニケーションにはコミュニケーションを行えば、その結果としてお互いが理解し合えるという積極的な意味合いがある。しかしながら、果たして、我々が行っているすべてのコミュニケーションは他者との共通理解を真に可能にするのであろうか。例えば、ある強い信念に基づいた宗教を信仰する人と他の宗教を信仰する人との間のコミュニケーションは双方を共通理解へと導くことが可能であろうか。現実には、共通理解どころか、双方の宗教的信念の違い故に戦争さえ起きている。たとえ人々が他者とコミュニケーションしようとしても、価値観は各人によって違うのだから時には他者と意見を共有できないことがあるだろう。また、コミュニケーションの結果として双方の関係が悪化することさえあるだろう。また、そもそも意見の合意を目的とせず、他者と会話をしていることもあるだろう。このようにして、他者とコミュニケーションしようとしても共通のものを共有できない場合や、そもそも共有を最終的目的としないうちにある場合がある。

果たして、コミュニケーションを通して、コミュニケーション参加者の間で共通理解が起こるのかという問題は、芸術が人々の間に共通理解をもたらす普遍的コミュニケーションであるというデューイの考えに対する批判と関連する。デューイは著書『経験としての芸術』(1934/1987)において、芸術をコミュニケーションの一形態として捉えている。例えば、デューイにおいては「結局、芸術作品とは経験の共有を制限づける大きな隔りと障壁に満ちた世界において起こりうる人間と人間との間の完全で妨げるもののないコミュニケーションの唯一の媒介」(Dewey, 1934/1987, p. 110)である。さらにデューイは「芸術は相互に理解できない多くの形式で存在している話し言葉よりも普遍的な言語様式である。芸術という言語が獲得されなければならない。…引用者・中略…：英語やフランス語やドイツ語の間の違いは芸術が話す時に解消する障害を作ってしまう」(Dewey, 1934/1987, p. 338)と述べている。このようにして、デューイは芸術が普遍的なコミュニケーションの形態であると述べるのだが、それに対して、果たして芸術はコミュニケーションの一形態であろうかという批判がなされる。例えば、ケイシー (Edward S. Casey) は「コミュニ

ニケーションは言語や身振りの適切で必要な一つの特徴であるが、それは芸術においては偽の墮落さえした存在であり、それは芸術の適切な目的である表現から芸術をそらしてしまふ」(Casey, 1971, p. 202) と述べている。

つまり、ケイシーは芸術はコミュニケーションの一形態ではないと述べているのである。また、デューイは芸術は普遍的な言語であると述べるが、果たして芸術の普遍性とは何なのであろうか。それはすべての人々が芸術を通せば互いに理解し合えるということを意味するのであろうか。例えば、この言及と関連して、ボアス (George Boas) は芸術は普遍的ではないと言及をなし、デューイが提示するコミュニケーションを批判している。例えば、ボアスは「芸術的コミュニケーションの普遍性は高貴な理想ではあるが、それは現実的には存在しない」(Boas, 1953, p. 182) とか、「隠蔽される芸術もまた存在する。それはコミュニケーションの芸術と同様に社会が必要とする芸術である」(Boas, 1953, p. 180) と述べている。すなわち、ボアスは芸術が持つ普遍性と同様に芸術が持つ個別性に着目しているのである。

デューイの言及によれば、人々が芸術を鑑賞すればするほど、人々は他者を理解するようになる。しかしなが

ら、構成主義者の視点からすれば、芸術の意味は各人によって異なつて構成されるため、各々が芸術を違ったように鑑賞すると言える。また、文化人類学の視点からすれば、芸術を通して理解されるものは各々の鑑賞者の文化によって規定されている。例えば、我々のすべてが原始芸術を理解することが可能であろうか。また、クラシック音楽に親しくない人はそれを楽しむことができるのであろうか。デューイは芸術の言語としての普遍性を強調するけれども、それと同様にして芸術を理解できない人もいるという点を欠落させているのではないか。デューイが提示する芸術的コミュニケーションには多くの論議が伴うが、ここでは本稿の目的と関連して、芸術が持つコミュニケーションとしての機能を批判する幾つかの意見を取り上げた。芸術的コミュニケーションの分析はデューイのコミュニケーション論を把握する上で不可欠な課題であるので、今後さらなる検討が必要である。

さて、以上に述べてきたようにデューイはコミュニケーションを通して我々は相互理解を深めると主張するが、実際には相互理解を深めるどころか、互いに理解できず、さらには、関係を悪化させてしまうコミュニケーションもあるように思われる。次に、コミュニケーションを通

して人々は成長できるのかという点を検討する。この点に関して、デューイは『民主主義と教育』の中で次のように論述している。

社会生活がコミュニケーションと同一であるだけでなく、すべてのコミュニケーション（それ故、すべての真の社会生活）は教育的である（Dewey, 1916/1966, p. 5）。

さて、ここで、デューイは「すべてのコミュニケーションは教育的である」と述べている。この文を検討する前に「教育的」という概念が意味するものを明らかにしなければならぬ。デューイにおいて教育とは人々の「成長」を促すことを意味する（Dewey, 1916/1966, pp. 41-53）。ここで、成長によって意味されるものとは何かといった問題が生ずる。筆者が以前に検討したように（高橋、一九九六a）、デューイは成長を環境との相互作用を通して意味を生成することと捉えている。以上の解釈に基づけば「すべてのコミュニケーションは教育的である」という文章は「すべてのコミュニケーションは人々の成長を促す」という文に言い換えることができる。

さらに、この文は「もしコミュニケーションが起これば、成長が起これる」という条件文に換言される。ここで「もしコミュニケーションが起これば、成長が起これる」という条件文が導き出されたが、それに反して、いくつかのコミュニケーションは教育的効果を持たないように思われる。例えば、コミュニケーションを行っていない相手のことを信用できない場合、または家の前で隣人に「ごきげんいかが？」と挨拶する時、そこに成長は生じているのであろうか。また、文化差のある見知らぬ人に出会う時に我々は時に不快感さえ感じるのではないだろうか。そのような場合においては成長は起きていると言えるのであろうか。仮に起きているとしたら、どのように起きているのであろうか。いずれにせよ、いくつかのコミュニケーションは教育的効果を持たないように思われる。

このようにして、デューイがコミュニケーションという言葉を用いる時、彼はそれが共通理解を促すと共に、人間の成長を促すものであるという積極的な意味のみをその言葉に付与している。それに対して、実際には、以上に述べたように、その意味を含まないコミュニケーションも存在している。ここで問題が生ずる。以上で問題とされた、一般的にコミュニケーションと見なされる、

共通理解を伴わず成長を促さない状況は果たしてデューイによって提示されるコミュニケーションが示す状況と同じなのであろうか。答えは否である。なぜなら、そもそも、デューイは、共通理解を伴わず、かつ成長を促さないコミュニケーションを彼のコミュニケーション概念の範疇には入れていないからである。それ故、他者がある状況をコミュニケーションと呼んだとしても、デューイからすればその状況はコミュニケーションが起きていないという場合がある。では、デューイによって述べられた、他者との共通理解と参加者の成長を促すコミュニケーションの範疇を満たす条件はいかなるものであろうか。以下にこの点を検討する。

## 二、共有経験としての「コミュニケーション」

ここでは、デューイによって意味されるコミュニケーションがどのような状況を示しているのか、その状況を満たす条件はいかなるものかについて検討する。デューイが意味するコミュニケーションは次の定義によってかなり明瞭になる。すなわち、デューイは『民主主義と教育』の中で「コミュニケーションとは経験が共通の所有

物になるまで、経験を共有していく過程である」(Dewey, 1916/1966, p. 9)と述べている。つまり、デューイによって提示されるコミュニケーションとは人々の共有経験の過程を意味している。さらに、デューイは『経験と自然』(1925/1988)において、コミュニケーション状況を詳細に記述している。それについては以前に筆者が詳述したので(高橋、一九九六b)、ここではそれを要約する。コミュニケーションが生じている状況とは以下のような状況である。

まず、コミュニケーションの場にAとBという二人の人物が存在する。そこで、AがBに「花を持ってきて下さい」と頼む。その時、依頼されたBは「Aの経験の中でその事物が機能しうるように、その事物を知覚する」(Dewey, 1925/1988, p. 141)。同時にAにおいても「その事物がBの経験の中で機能しうるようにその事物を見る」(Dewey, 1925/1988, p. 141)。つまり、BはAがなすであろうやり方を予期して花を持ち運ぶであろうし、AにおいてもBがなすやり方を予期して花を持ち運ぶことをBに依頼しているのである。このようにして、双方の関わりは相手の立場に立つことを通して行われる。この場において、Bは花を求めているAの意図を達成するために、

実際に花を取りその花をAに手渡すという行為をなす。そこでは、お互いが自分勝手に行為するのではなく、花を求め、持ち運ぶという協同的行為に参加していることになる。

このようにして相手の立場に立つことを通した協同的行為への参加をデューイはコミュニケーションの本質であると論じている (Dewey, 1925/1988, p. 141)。コミュニケーション参加者の一方が他者の言っていることを理解できなかったり、理解しても行為として実行しない場合はデューイが論ずるコミュニケーションの範疇には入らない。また、コミュニケーションにおいて相手の立場に立つということは、我々の背景にあり、我々をある仕方で行為させるに至る「状況 (situation)」を把握することである。状況はコミュニケーションする双方の人間と環境との相互作用を通して生ずる。状況は「それが持つ直接的で浸透している質 (quality)」によって一統体となる」 (Dewey, 1938/1991, p. 73)。各々の状況には、この独特の質が行き渡っており、それは雰囲気のようなものである。例えば、状況の質が信頼関係によって生ずる心地の良いものであれば、その中で行われるコミュニケーションはスムーズに進行し、気まずいものであればコミ

ュニケーションは本来目指すべきものからかけ離れ歪められてしまうこともあるだろう。人間はそのような独自の質を持った状況との関係でコミュニケーションを行い、また、そのコミュニケーションが違った質を持つ状況を形成していく。このようにして、コミュニケーションはダイナミックな状況の中で行われる。

さて、この協同的行為が行われている状況にはある目的が含まれている。目的を持った状況はその目的の達成を目指した協同的行為を通してより良い状況へと進行する。目的を持たない状況はそのままの状態を続行するか、ただ混乱するかである。ただ注意すべきことは、この目的はコミュニケーション参加者に外的かつ強制的に与えられるものではないということである。コミュニケーション参加者はその状況が持つ目的に対して自ら興味を抱いており、それに専心没頭するということが重要なのである。他者によって強いられたい、いやいやながらその協同的行為に関わることはデューイの主張する教育的コミュニケーションではない。また、協同的行為は他者との協力の下に達成される。つまり、コミュニケーションでは、協同的行為を達成するために他者と協力する態度が必要である。それは、アレクサンダー (Thomas M.

Alexander) がデューイのコミュニケーション論の基底にある「ケアと愛のコンテキスト」(Alexander, 1995, p. 150) について論じているように、他者に対する愛とも言えるものである。

さて、以上に述べたような共有経験としてのコミュニケーション状況を成立させる条件は以下のように要約される。まず、その状況には、ある目的が存在し、それに対して人々は興味を抱き積極的に参加しており、その目的を成し遂げるために他者と協力するということである。

では、このような条件が満たされた状態、すなわち、コミュニケーションが成立した状態を我々はどのように知るのであろうか。ある人は、その参加者に対して「君はただコミュニケーションが起きたと信じているだけかもしれない」と問うかもしれない。しかしながら、その参加者にとっては他者と理解し合っていると信じているにいたる状況があるのである。デューイが「行為の協同的一致ほど、満たされやりのある行為様式はない。それはそれと共にある全体の中に参加しとけ込んでいる感じをもたらす」(Dewey, 1925/1988, p. 145) と述べているように、その状況の中に包まれた人は他者と自己を包むこむ状況と一体となった感覚を得るのであり、その状況は

参加者に他者と理解し合っているという強い感じを抱かせる。そのような状況がなければどうして他者と理解し合っていると感じることができるであろうか。以上の条件を克服した時に初めてデューイの主張するコミュニケーションが起き、人間間における共通理解が起こり、また、そこに参加している人々の成長が起こる。そして、その状況は参加者に深い「生の直接的な高揚」(Dewey, 1925/1988, p. 144) の感情を与える。

### 三、コミュニケーションの基盤となる

#### 民主主義社会

以上に述べてきたように、デューイの主張するコミュニケーション状況では、ある目的が存在し、それに対して人々が積極的に参加し、その目的を成し遂げるために互いに協力することが重要である。コミュニケーションは人々の間に共通のものを作り、それは共同体を形成する。コミュニケーションが共同体を形成することに、デューイは『民主主義と教育』の中で以下のように述べている。

人間は共有しているもののおかげである共同体の中で生きたる。コミュニケーションとは、人々が物事を共有するようになる方法である。人々が共同体つまり社会を形成するために共通に所持していなければならぬものは、目標、信念、熱望、知識、共通理解—それは社会学者が同意志と呼んでいるものである。：〈引用者・中略〉：共通理解への参加を保証するコミュニケーションは同類の情緒的かつ知的な性向—期待や要求に対する反応の仕方のようなものを獲得するものである (Dewey, 1916/1966, p. 4)。

このように、コミュニケーションは共同体を形成する手段であるが、それと同時に人々が互いに理解し合うためにはコミュニケーションの前提としてある程度はじめに共通のものを所持していることも必要である。共通のものは共同体の中に存在する。つまり、コミュニケーションが共同体を形成すると同時に、コミュニケーションは既存の共同体内で生じていると言える。要するに、コミュニケーションは既存の共同体を基盤にして生じ、それがまた新たな共同体を再構築するために作用しているのである。このようにして、我々は自身の共同体内でコ

ミュニケーションを行っている。それでは、窃盗集団や宗教団体や暴走族やいじめ集団といった集団内でのコミュニケーションはどのように説明できるのであろうか。彼らは彼ら自身の集団内で共通の目的を共有し、それに積極的に参加しているのではないだろうか。しかしながら、明らかにデューイはそのような集団を許容しないだろう。では、どのような共同体がデューイによって理想とされるものであろうか。

デューイは、民主主義社会を理想的な共同体として捉えている。これについて、デューイは「民主主義は政府の形態以上のものである。それは本来は共同生活、結合されコミュニケーションされた経験の一樣式である」(Dewey, 1916/1966, p. 87)と述べている。では、この「共同生活」によって意味されるものは何であろうか。それは家庭生活を意味するのであろうか。宗教団体はそこに含まれるのであろうか。デューイは民主主義社会を特徴づける二つの基準について「いかに意識的に共有されている興味が多様であるか」(Dewey, 1916/1966, p. 83)という基準と、「いかに他の集団との相互交流が十分で自由であるか」(Dewey, 1916/1966, p. 83)という基準を提示する。デューイによれば、民主主義社会とは、

その社会のメンバーによってできるだけ多くの興味が共有されており、かつ、その社会がその他の社会とできるだけ多くの交流を持っている社会を指している。例えば、デューイは家族内のすべてのメンバーが他のメンバーと物質的、知的、かつ、美的に興味を共有しており、また、他の学校や文化機関との関係を持っている家族を理想的な民主主義社会と捉えている (Dewey, 1916/1966, p. 83)。

では、先に述べたような窃盗集団やいじめ集団はどのように説明されるのであろうか。デューイはそれらは民主主義社会ではないと論ずるだろう。なぜなら、その集団内では共通の目的が少なく、他の共同体との交流がほとんどないので、それらは理想的な共同体であるとは言えないからである。しかしながら、民主主義社会における共通の目的と相互作用の数はかかる基準は何なのであろうか。どのくらい数多く多様な興味が共有されているければならないのであろうか。どのくらい十分で自由な相互作用が要求されるのであろうか。その基準は曖昧であり、どの集団を民主主義社会と見なすのかは困難である。

実際には、以上の基準に加えて共同体において何が目指されているのかという目的そのものの質の問題があげ

られる。なぜなら、単に目的を数多く共有していれば良いという問題ではないからである。デューイによれば、民主主義社会においては、「学習の目的かつ報酬である連続的な成長の可能性」(Dewey, 1916/1966, p. 100) が保証されていなければならない。すなわち、ある社会がデューイが目指す民主主義社会かどうかということはその社会で生活している個々のメンバーが各々成長しているかどうかという条件を満たさなければならない。つまり、民主主義社会における目的はすべてのメンバーの成長と最終的に結びついていなければならない。この基準によれば、いじめ集団や窃盗集団は個人の成長の機会を奪っているので民主主義社会の基準から排除される。

以上のように、デューイは、人々が興味や価値を共有し、互いに密接に結びつき、そこで各々が成長している民主主義社会に価値をおいている。デューイによれば、民主主義社会はコミュニケーションという形態で存在する社会であって、コミュニケーションは民主主義社会を特徴づける重要な要素となっている。デューイが「社会は伝達やコミュニケーションによって存在し続けるだけでなく、伝達やコミュニケーションの中に存在すると言えるだろう」(Dewey, 1916, p. 4) と述べるように、「コミ

ユニケーションの存在するところに民主主義社会が存在し、かつ民主主義社会の存在するところにコミュニケーションが存在するのである。コミュニケーションと民主主義の定義の仕方には循環論の問題があるが、デューイが提示するコミュニケーションによって意味されるものは、それが民主主義社会を形成しているかどうかという点との関連で捉えることが重要である。

#### 四、「コミュニケーション概念を生み出した状況

以上に検討してきたように、デューイはコミュニケーションという概念に積極的な意味づけを与えている。しかしながら、なぜ、そこまでして、デューイはコミュニケーションを行うことを重要視し主張したのであるうか。デューイがコミュニケーションを主張したのはいかなる状況下においてであろうか。人間はある状況下において事物に対する価値づけを行っているため、その価値づけの検討はその価値づけをする人物が含まれている状況との関連で行わなければならない。これと関連して、デューイは論文「絶対主義から実験主義へ」(1930/1984)の中で「全体的に見て私に影響してきた力は本よりも人々

や状況から生じた」(Dewey, 1930/1984, p. 155)と述べている。つまり、デューイの思想発展に強く影響したのは彼の周囲の人々や状況であった。では、具体的には誰の影響があったのであろうか。どのような状況がデューイにコミュニケーション概念を語らせる状況となったのであろうか。

人為的影響と関連して、デューイ自身が「絶対主義から実験主義へ」の中で、コミュニケーション概念の発見にはジェームズ (William James) 主義心理学が大きく影響していると述べている。具体的に、デューイは「ジェームズ主義心理学の客観的かつ生物学的アプローチが顕著な社会的カテゴリー、特にコミュニケーションや参加というカテゴリーの重要性に気づくことに直接的に導いた」(Dewey, 1930/1984, p. 159)と述べている。では、ここで述べられる「ジェームズ主義心理学の客観的かつ生物学的アプローチ」とはいかなるものであろうか。実際に、デューイが述べる社会的相互作用としてのコミュニケーションのモデルは、デューイが初期に提示した生物と環境との相互作用のモデルを基盤にしていると考えられるが、ジェームズ主義心理学の影響とは、この生物と環境との相互作用のモデルを意味するのであろうか。

また、ジエームズ以外の人物の影響はどのように考えられるのであろうか。加えて、いかなる諸状況がデューイにコミュニケーション概念を語らせる状況となったのであろうか。それは、社会的状況であらうか。個人的状況であらうか。哲学的状況であらうか。社会学的視点から見れば、デューイのコミュニケーション概念は当時の社会状況の影響を受けていたと言える。デューイの時代においては社会の激動と変化の結果として、かつて人々が親密な関係性を持っていた共同体なるものが崩壊したことで、それに危機を感じたデューイが、そのような関係性と共同体を取り戻すための手段となるコミュニケーションを行うことを強く主張したと言えるかもしれない。また、これと関連して、以上に検討したように、デューイのコミュニケーション概念はコミュニケーションを必要とする民主主義社会を強調する彼の価値観に影響されていたと考えることも可能である。ベルマン (Larry S. Belman) が述べるように「コミュニケーション概念はデューイのほとんどの社会思想における中心の特徴である」(Belman, 1977, p. 29) ならば、最近におけるウエストブロッタ (Robert. B. Westbrook) やウエスト (Cornel West) によるデューイの社会思想の再評価の流れはデ

ューイのコミュニケーション論の再評価の動きと結びつくものであると言える。しかしながら、いかに確実にデューイのコミュニケーション概念が当時の社会の影響を受けていたと証明できるのであろうか。哲学的視点から見れば、デューイのコミュニケーション概念は二元論を克服しようとする立場から導き出されたと言うことができる。当時、デューイは二元論を克服しようとする立場にあり、目的と手段、社会と個人というように区別をなす立場を徹底的に批判していた。実際にデューイがコミュニケーションについて論ずる時、それは手段としてだけでなく、目的として言及されている。デューイが「コミュニケーションは道具的であると同時に完遂的である」(Dewey, 1925/1988, p. 157) と述べるように、彼がコミュニケーションについて論ずる時、そこには手段と目的という双方が含まれており、そこに二元論に見られるような区別はなされない。これと関連して、デューイは様々な区別を作る二元論を批判した後、「コミュニケーションの手段的機能と目的的機能が経験の中で共に生きる時、そこには共同生活の方法であり報酬であるところの知性と、愛情や賞賛や忠誠を集めるのにふさわしい社会が存在する」(Dewey, 1925/1988, p. 160) と述べている。

このようにして、哲学上の二元論を打破するために、デューイは自身のコミュニケーション概念を提示したと言うこともできる。

以上のように、デューイがなぜそれほどまでにコミュニケーションを主張したのか、その文脈をいくつか考えることができる。しかしながら、そこにはあまりにも多くの影響要因が考えられるため、それが原因でそれが結果であるのか特定化することはできず、諸々の影響要因については今後さらに詳細に検討していくことが必要である。ただ、ここで言えるのはデューイが彼独自の様々な状況の影響を受けながら、彼自身のコミュニケーション概念を認識し、主張するに至ったということである。デューイは様々な状況をくぐり抜けながらコミュニケーション概念の重要性を認識し、その概念に積極的な意味づけをなしたのであり、それは自身の経験に根づいたコミュニケーションへの信仰とも言えるものである。

## おわりに

デューイの主張するコミュニケーション概念によって意味されるものは共有経験の過程を指している。そのよ

うな経験では、ある共通の目的（最終的にこの目的は人々の成長と結びついている）を達成するために、他者と協力する態度、その目的に自主的に参加する態度が重要である。そして、このようなコミュニケーションが存在しているということは、そこに同時に民主主義社会が存在していることを示しており、そこにおいて、人間の成長が促され、共通理解が起るのである。このデューイのコミュニケーション概念は、デューイ自身がくぐり抜けてきた様々な状況によって規定された独自の意味を含んでいる。デューイは、社会的状況、哲学的状況など、様々な状況における諸問題を感じ、それを解決する手段として、自らの倫理観に基づいて独自のコミュニケーション概念を提示した。

デューイが提示するコミュニケーション概念に反して、現実社会において一般的にコミュニケーションと見られる状況は時に表面的で、成長を促すどころか、他者を理解できずに苦しみ、成長を妨げさえする。それ故、デューイが提示するコミュニケーションはあまりにも理想的であり、実行不可能であると言われるかもしれない。また、デューイが主張するコミュニケーションが実現すれば確かに共通理解と成長が起きるかもしれないが、それ

を常に行なうことは必要条件なのかという問題も起こるであろう。デューイが主張するコミュニケーションを望んでも、価値観の違いから苦しむこともあるだろう。いかに共通経験が重要であったとしても、無理して苦しみなから価値観の大幅に違う人との共通経験を求めなければならぬのであろうか。このようにして、現実的にデューイのコミュニケーションは可能であろうかという問題や、可能であったもそれは必ずしも必要なのかという問題がある。

デューイのコミュニケーション概念は以上のような問題を抱えているが、我々はそこから多くを学ぶことができる。デューイが提示するコミュニケーションは単に表面的に他者と話すのではなく、実際に経験を共にし、他者を理解し、その経験を通して物事の意味を獲得することである。実際には、それを通してしか、人間間における深い共通理解とそれに基づいた自己の成長という状態はありえない。他者と自己を包み込む状況と一体となった感覚を生じさせる理想的コミュニケーションの状態を多少なりとも経験した人は誰でも、それが持つ教育的意味の深さを感じるに違いない。デューイは『哲学の再構築』(1920)の中で「コミュニケーション、共有された

生活、共有された経験の奇跡を持つ情緒的かつ神秘的な力が自然に感じられる時、現代生活の厳しさと粗野なところは、これまで陸にも海にも見られなかった光の中で洗われるだろう」(Dewey, 1920, p. 211)と述べている。このようにして、コミュニケーションが持つ力を強く訴えるデューイの態度はコミュニケーションへの信仰とも言えるものである。デューイによるコミュニケーションが持つ力への樂觀視や、そのコミュニケーションが現実的に可能かどうか、可能であったとしてもそれは必要なかということに対して多くの批判がなされる。しかし、デューイの唱えるコミュニケーションが可能であると信じ、それを表現しようとする態度は理想により社会を改善するという意志を反映するものであると言える。ジェームズが「ある事実の中にある信仰がその事実を作ることを助けることができる」(James, 1897/1956, p. 25)と述べるように、真のコミュニケーションを求める態度、それを行為として実践していく態度が、真のコミュニケーションを可能とするのであろう。

\* 引用中におけるアンダーラインは原文ではイタリック体を示す。

## 參考文獻

- Alexander, T. M. (1995). John Dewey and the Roots of Democratic Imagination. In L. Langsdorf & A. R. Smith (Eds.), *Recovering Pragmatism's Voice: The Classical Tradition, Rorty, and the Philosophy of Communication* (pp. 131–154). Albany: State University of New York Press.
- Belman, L. S. (1977). John Dewey's Concept of Communication. *Journal of Communication*, 27 (1), pp. 29–37.
- Boas, G. (1953). Communication in Dewey's Aesthetics. *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, 12 (2), pp. 177–183.
- Cremin, L. A. (1964). *The Transformation of the School: Progressivism in American Education, 1876–1957*. New York: Vintage Books.
- Casey, E. S. (1971). Expression and Communication in Art. *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, 30 (2), pp. 197–207.
- Dewey, J. (1920). *Reconstruction in Philosophy*. New York: Henry Holt and Company.
- Dewey, J. (1966). *Democracy and Education*. New York: The Free Press. (Original work published 1916)
- Dewey, J. (1984). From Absolutism to Experimentalism. In J. A. Boydston (Ed.), *The Later Works, 1925–1953, Volume 5: 1929–1930* (pp. 147–160). Carbondale: Southern Illinois University Press. (Original work published 1930)
- Dewey, J. (1987). Art as Experience. In J. A. Boydston (Ed.), *The Later Works, 1925–1953, Volume 10: 1934* (pp. 1–352). Carbondale: Southern Illinois University Press. (Original work published 1934)
- Dewey, J. (1988). Experience and Nature. In J. A. Boydston (Ed.), *The Later Works, 1925–1953, Volume 1: 1925* (pp. 1–326). Carbondale: Southern Illinois University Press. (Original work published 1925)
- Dewey, J. (1991). Logic: The Theory of Inquiry. In J. A. Boydston (Ed.), *The Later Works, 1925–1953, Volume 12: 1938* (pp. 1–527). Carbondale: Southern Illinois University Press. (Original work published 1938)
- James, W. (1956). The Will to Believe. In "The Will to Believe and other essays in popular philosophy & Human Immortality: two supposed objections to the doctrine" (pp. 1–31), New York:

- Dover Publications, Inc. (Original work published 1896)
- Langsdorf, L & Smith, A. R. (Eds.), (1995). *Recovering Pragmatism's Voice: The Classical Tradition, Rorty, and the Philosophy of Communication*. Albany: State University of New York Press.
- 高橋佳子 (一九九六a)。「J・デューイの意味生成論」、『筑波大学教育学研究集録』、第二〇集、一〇一〜一一〇頁
- 高橋佳子 (一九九六b)。「デューイにおける意味生成としてのコミュニケーション事象」、『教育方法学研究』、第二二巻、四一〜四八頁
- West, C. (1989). *The American Evasion of Philosophy: A Genealogy of Pragmatism*. Wisconsin: The University of Wisconsin Press.
- Westbrook, R. B. (1992). *John Dewey and American Democracy*. Ithaca: Cornell University Press. (Original work published 1991)